



▲B.W.C.キンバータクティカル2のフレームとスライド。組み立てキットなので当然だが、HW樹脂の表面がナマナマしく、少しキズもある状態だった。



▲セラコートをするとうなる。入念な下地仕上げをするそうで、キズもすっかり消えている。キンバーは「グラファイトブラック」という色にしてもらった。

▶完成した状態。前後サイトやハンマー、セフティまわりの金属パーツも全て同色のセラコートだ。ホルスターはブレードテック・エクリプスOWBホルスター。



■セラコートはタフか？

本誌6月号で、謎のプライベート・セキュリティ・コントラクター（略して謎コン）スタイルへと変貌を遂げたちよいさバオヤジこと小堀ダイスケ。

実はここ最近、自分の所持するモデルガン、タニオコバGM-7ベースのB.W.C.キンバータクティカル2の表面処理についてずっと悩んでいた。

組み立てキットだったという事もあり、全体的にHW樹脂特有のナマナマしさが残っていて、表面処理を施したくても、市販のスプレー塗料ではうまく仕上げる自信がなかったのだ。

そんな中、最近色々なところで耳にするようになったのが「セラコート」だ。米軍が採用し、実銃メーカーも続々と自社製品の表面処理に指定しているコーティングである。有名などころではコルトやSTIなどのハンドガンから、レミントン、マクミラン、HSプレジジョン、といったライフルまで、今や実銃の世界ではスタンダードとなりつつある。

実際、ボクのまわりでも、セラコート加工の取り扱いを始める銃砲店が出て来ているのだが、正直、ボクは驚きを隠せない。

というのも、日本の銃砲店のお客さんというのは銃に対して愛情のない人も多く、(笑) ガンプロ読者の想像を絶するような銃の取り扱いをする場合もあるからだ。特にハンターの場合、銃をぶつけたり引きずったりするのは言うに及ばず、手入れと称してブレイククリーナーをバシャーッと吹き付け、雑巾でゴシゴシやったりするのは日常茶飯事だ。もちろん銃は道具だし、ある意味それが当然だとも言えるのだが、そういった扱い方が想定される以上、生半可な耐久性ではク

Cerakote Firearms Coatings

セラコート耐久性 徹底テスト!

REPOET 小堀ダイスケ

<取材協力>
鈴友株式会社
<http://www.suzutomo.com>
Facebook <https://www.facebook.com/SuzutomoGunTailoring>



▲松尾副編のマルイグロック17のスライドとアウターバレル。スライドは肉抜き加工されているが、けっこう使い込んでいて、擦りキズも多い。



▲コート加工後。こちらは「アーマープラック」という色でオーダーした。同じブラックでも何種類もあるのがセラコートの特徴だ。



▲ホルスターはホフナーズ・ホルスター U3 ウルトラックス・ラッチ・ホルスター。国内では無名の製品で、松尾副編らしい普通っぽくないチョイスだ。



▲これから地獄のテストを待ち受ける2挺のハンドガンたち。心なしか表情も重い(?)

レームの嵐となるのがオチである。

米軍のミルスペックや実銃メーカーがキビしいのは当然としても、日本の銃砲店で扱われているという事実は、セラコートの耐久性を語る上でも重要だとボクは思うのだ。

ひとつ気になるのは、ポリマー系樹脂製のトイガンにセラコートをした場合、金属製の実銃と同じように高い耐久性を保てるのだろうかというコトだ。そこでボクは、自分のキンバーにセラコートをやってもらう事にした。

数週間後、出来上がって来たパーツの仕上がりは本当に素晴らしい物だった。

HW樹脂、金属の区別なく均一にコーティングされたキンバーの姿は、まさに実銃と見紛うばかりの出来ばえだったのだ。そんな時、松尾副編集長より恐ろしい指示が下ったのである。

「小堀さん、キンバーのモデルガン、セラコートしたんですね。じゃ、ホルスターからのドロウで耐久性テストをやりましょうよ。回数ですか?そう



◀キンバーのデトネーターにもセラコートをしてもらった。左は加工前、右が加工後。

ねえ、思いきって1,000回やっちゃいましょう!」

「ええ〜っ!せ、1000回となー!う〜む…」

しかもテストには、実銃用のカイデックス製ホルスターを使うという。松尾副編からブレッドテック・エクリプスOWBホルスターを借りる事になったが、実銃用の固いホルスターから1,000回もドロウしてハゲないコーティングなどあるのだろうか。

正直、そんな思いがボクの脳裏をよぎったが、もはや挑戦するしかない。今回、ただドロウするだけでは面白くないので同時に発火テストも行った。注目したいのは、デトネーターに施されたセラコートの耐久性だ。

キャップ火薬とはいえ、爆発の高温高压に直接さらされる部分がどうなるかも見てみたい。

最後に、松尾副編がこんなコトを言った。

「ボクも自分のマルイグロック17で耐久テストをしますよ。最近セラコートをしたばかりのお気に入りなんですけど、小堀さんのモデルガンだけじゃかわいそうですかね」

さすがは松尾副編、他人に過酷なテストをやらせるだけではなく、自分もやるという。2人で挑戦するならヤル気も増すというモノだ。赤信号、みんなで渡れば怖くない! (古い?)

かくして、セラコートのガチ耐久性テストが始まったのである。



▲怒濤の1,000回ドロウを実践中のボク。本場アメリカでタクトレ経験のある有名ガンライター直伝のダブルハンドシューティングだ。

■怒濤の1,000回ドロウ!

結局、1,000回ドロウは3日間で終える事が出来た。ちゃんとホルスターを腰に着けて、ハンズアップからのダブルハンドシュートである。こんな拳銃修行は約30年ぶり、MGCのシューターワンに明け暮れていた中学生時代以来だ。そして肝心のセラコートだが、結論から言うと、素晴らしい耐久性を見せてくれた。詳細は写真とキャプションをご覧頂きたいが、信じられないコトに、コーティングが剥がれた部分は全くなかったのである。

キンバーのスライド上部や先端、セ

レーションのエッジ、トリガーガード側面が光って見えるが、これは固いカイデックス製ホルスターと激しくこすれた結果、ツヤ消しの表面が潰れてピカピカになっただけで、コーティング自体は全く剥がれていない。

くり返すようだが、本当に1,000回ドロウをやった結果である。正直言うと、最初の内はホルスターから抜く時の「ジャコッ!」という音がなんだか痛々しくて、ドロウするたびセラコートが剥がれて行くような感じがして気が引けたものだが、300回を越えたあたりからだんだん調子に乗って、ワザと強く



▶1,000回ドロウ前の状態。限りなくホンモノっほい。



◀タニオコバGM7ベースのキンバーはBLKも絶好調。デトネータヘッドのOリングが3つしかなかったため発火テストは150発で終えたが、ジャムはほとんどなかった。



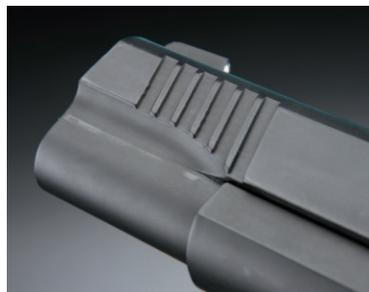
▲1,000回ドロウ後のスライド。上面のタテ方向に付いているのはホルスターとこすれた跡だ。ツヤ消しがなくなっているが剥がれてはいない。



▲トリガーガード側面にもかなり跡が付いたが全く剥がれる気配がない。コーティングが薄く圧縮されている感じが分かるだろうか。



▲松尾副編のグロック。スライドのエッジ部分がこすれて光っているが、やはりどこも剥がれてはいなかった。



▲スライド先端のセレーション。使い込んだ結果、立体感が出てなんとイイ雰囲気になった。



◀◀キンバーのデトネーター。火薬の高温高压に直接さらされる先端部のみセラコートが薄くなっているようだ。



▲1000回ドロウのおつとめを無事に終え、ホッと一息のキンバー。



▲同じグロック17。セラコートの加工料金はフレーム、スライドともに各税込み5,400円。オート1挺分で10,800円となる。詳しくは取扱店まで。

こすり付けながら抜いてみたりした。

しかし、いくら強くやったところで剥がれる気配は全くなかったのだ。

そして松尾副編のグロックだが、ご覧の通りこれもセラコートは剥がれておらず、スライドのエッジ部分がこすれて光っているだけだ。

松尾副編によれば700回のドロウでギブアップしてしまったそうだが、編集で忙しい人なので、そこは大きなココロで許してあげようとボクは思っている(笑)。冗談はともかく、これ以上ドロウを繰り返していたとしてもおそらく結果は同じだったろう。

セラコートのこすれた部分をよく見てみると、うまく表現するのは難しいがコーティングがひたすら薄く圧縮されているような感じで、削れたり剥がれたりするという気配は全くなかった。これは実銃用としては重要な事で、例えこすれても剥がれなければ母材をサビから守る事が出来る。もちろんトイガンでも、一般的な塗装のように扱いに気を遣わなくて済むのがスゴい。

なにより、実銃と全く同じコーティングだと思えば、自分の銃に対する愛着もまたひとしおだろう。ボクなんか、

今度は自分が所持する実銃にセラコートをしてみようかと考えているほどだ。

発想の順番がなんだか逆になってしまったが、コレなら実銃にどんどん採用されているというのもうなずける。

また、前述のような、日本の銃砲店のワイルドなお客さんたちでもじゅうぶん納得するはずだ。

メーカーの鈴友は直接の受注をやっていないそうだが、提携店はすでに25店舗ほどに増えているとの事だ。自分のトイガンをグレードアップしたいという方は、6月号の173ページをご参照の上、提携店に申し込んで頂きたい。